
不思議な物語第 2 章

弓ノ原祈亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議な物語第2章

【Nコード】

N4355R

【作者名】

弓ノ原祈亜

【あらすじ】

「不思議な物語」の続編になっています。

この話から読んでも多分、大丈夫だとは思っているのですがww

魔法学校で再会したりリイとシルバー。

そして半ば無理やり、リイは王城に上がる事になる。

シルバーと婚約式を上げるために。

でも、まだ恋が始まったばかりでどうすればいいのか分からない。

自分はどうすればいい？

不安を抱えるまま、また運命は動きだします。

プロローグ（前書き）

そう。

ここからこれからの話は始まったのです。

プロローグ

「あいつらはどこに行つたんだ？」

若い少年は森の中を彷徨っていた。

深い森はどこまでも続く、自然の迷路のようだ。

前も後ろも、左右も同じ景色ばかりが続く。

つい先ほどまで一緒にいたはずの友達の姿がどこにもいない。

森の中を散策しようと言いだしたのはあの二人なのに。

自分は止めたのに、無理やり引きずり込まれたのに。

まさか、隠れて驚かそうとしているのか。

……あり得る。

そういう事を生きがいに行っている二人だ。

うんざりしながら、短い若草色の髪をかきあげた。

一人で森の中にいると、何故か心がざわざわしてくる。

騎士を目指して修行をしているのに、まだまだ修行不足なのだろうか。

さらに、うつすらと霧が出てきてしまった。

「おじ上に入っではいけないって言われていたのはこういう事か」

森の中で霧まで出てきたら出口が分からなくなる。

うんざりしていた気持ちが、だんだん不安へと変わっていく。

「緑は俺の味方だから、怖がる必要はないのに……」

でも、まだ幼い自分はちっぽけで、一人では何もできない。

怖い。一度そう思うとそれを払拭出来なくなる。

霧はどんどん濃くなっていく。

どうしよう。どうすればいい？

必死に走って出口を探す。でも濃霧で目の前すら何も見えなかった。だから、崖があつたのに気付かなかつた。

「うわああー！」

少年は体勢を崩して、一気に崖の下へと落ちて行つた。

まだ世界が生ぬるい平穏な仮面を被っていた頃、世界中にある話題が広がっていた。

世界を束ねるライツパー王国の第三王子オパールネス・シルバー・ライツパーに正式な婚約者が見つかったという話題だ。

オパールネス王子には小さい頃からの想い人がいて、その行方を捜している事は、ちょっとした吟遊にも読まれるほど有名な話だったが、十八に王が決めた婚約者と結婚式を行うとされ、悲恋の王子と呼ばれていた。

しかし、その想い人が見つかり正式に婚約を取り交わしたという。

お相手は、王宮の神官でもあり侯爵の爵位をもつ、アカギラ・ルル・ミルのご息女、

リリイ・ルル・ミル。

リリイ嬢は記憶を失い、平民として魔法学校にいた。それを王子が愛の力で見つけ出したという。

世界中の女性たちはこの愛の物語に感動していた。

そして、二人の事を祝福していた。

3日目

「な、何これ……」

新聞を握りしめる手が、小さく震える。

新聞から覗くのは表情豊かな濃い茶色の瞳。

綺麗に束ねられた亜麻色の髪には名前と同じ白百合の髪留めがさしてある。

リリイは、新聞を持ってきたジオガードを信じられない様に、見つめていた。

「な、何で……新聞に私の事が……？」

新聞の一面に書かれているのは、リリイの事だった。そして、恋人のシルバーについてだ。

「当たり前だろう。王子が結婚するんだ。世間がほっとくわけないだろう」

至極平然と紅茶を口に含む、ジオガード。

リリイは自分の考えの範疇に及ばず、項垂れるしかない。

突っ込まなければならぬ所を聞き逃すほど。

ここは王宮の客間の一つ。三日前からリリイはここに滞在している。その前までは魔法学校の生徒だった。

親友と使い魔と、それなりに平穩に暮らしていたのだ。

それが一気に崩れ去り、黒教徒やら、ダキネルの民に狙われるなど大変な思いをした。

でも、初恋のシルバーが迎えに来てくれて、助けてくれた。

まあ、勝手に結婚の証を立てられ、上手い様に婚約式までする事に

されてしまったが。

新聞にはシルバーがリリイへの想いについて色々書かれてあった。どこまで本当なのかは分からないが。

しかし、三日だけでよくここまで調べて書けるものだと、思えるほど書いてある。

「シルバーって、本当に王子様なんだね」

小さく呟く。

魔法学校に来てくれた時も最初は、ニックネームで庭師に変装していたし、リリイの幼いころの記憶では王子様といっても、絵本の王子様と重ねていたから、本物の王子様という認識はなかった。

でも、王宮に来て急に実感した。

シルバーは王子。世界を治める王の息子。

リリイは侯爵家の娘というのも三日前に知ったばかりで、貴族としての自覚も嗜みもない。

あまりにも不釣り合いだ。

でも、婚約式の準備は着々と進んでいく。

リリイは複雑な心境だった。

コンコンと、ドアをノックする音が響く。ジオガードがドアを開けに行った。

ジオガードが自分からドアを開けに行くという事は、来たのはリリイのよく知っている人だ。

豊かな金の長い髪を揺らしながら入ってきたのはリリイの親友のラルリイグだ。

「ラル！お帰りなさい」

リリイは新聞をたたみ、親友の所へと急ぐ。

ラルリイグは、ドアを開けてくれたジオガードには目もくれず、

リリイに歩み寄った。

ジオガードは小さく息を吐き、テーブルについた。

「リリイ、ダンスの先生が上手だって褒めていたわよ。良かったわね」

優しく微笑み、ラルリーグはリリイとテーブルについた。

メイドがラルリーグに紅茶を入れる。

温かな香りに、心が癒される様だ。

「だって、ダンスは学校で少しやっていたし。ラルが教えてくれたしね」

褒められて、リリイは少し恥ずかしそうに言った。

王宮に来て三日の間に、ジオガードによって貴族の嗜みを覚えるための教師が集められた。

ダンスはリズム感が良かったのか、なんとかこなせてはいるが、舞踏会に出た事がないリリイは動きがまだまだ硬い。

それでも、出来ないよりかはましであろう。

テーブルマナーや言葉使い、ドレスの着付けも覚えた。

どれも、シルバーが恥をかかない様に。

「ところで、主と仲直りしたのか？」

ジオガードの鋭い言葉に、リリイは紅茶に噎せた。慌ててメイドが布をリリイの所に持ってきた。

メイドがいちいちいるのにも、リリイは違和感があって慣れない。

「……ケンカしてない」

「しただろう。主を吹き飛ばしたよな？」

「確か、大嫌いとか、結婚は絶対にしないとか言っていたよね？」

ラルリーグもにつこりと笑いながらたたみ掛けてくる。

いつもはケンカばかりのラルリーグとジオガードだが、こういう時は息がぴったりだから厄介だ。

リリイは反論できずに、頭を抱えた。

確かに、王宮に来る前にリリイはシルバーを拳で吹き飛ばした。結婚しないとも言った。

でもそれは、周りから固められていくようで、そのやり方が気に入らなかったからだ。

シルバーを嫌いになんてなっていない。

結婚はまだ実感ないけれど。

いつかは……そう。いつか結婚するならシルバーが……

でも、新聞の記事を読んでも、婚約式を行う事になってしまっている事も考えると、結婚も目の前の出来事なのかもしれない。

王宮にきて、そう思うようにもなってきた。

「ラル、私結婚した方がいいと思う？」

「え？ 結婚？」

唐突なリリイな言葉に、ラルリーグは目を瞠った。

「それって……プロポーズされたっていう事？」

「へっ！？ ち、違うよ。だって三日前からシルバーと会ってないもの」

リリイは顔を真っ赤にして首を振った。

自分が何を言ったのか、急に自覚して恥ずかしくなった。

「それはそうだろう。勝手に城を抜け出した罰として、山ほどの仕

事をこなしている筈だからな」

のんびりとした口調。

きつと、ジオガードは全く気にしていないのだろう。

「え？　そ、そうなの？」

驚いたリリイは思わず体を乗り出す。

王子という身分は忙しいだろうとは思っていたが、自分の為にそう
なっていたとは知らなかった。

なんだか、申訳がない。

「あと、リリイに嫌われたかもと、うじうじとナメクジみたいにな
られていたな」

「確かに。影が薄くなっていたわね」

これはもう、間接的に「なんとかしろ」と言われているも同然だっ
た。

リリイは小さくため息をついた。

そう。リリイはシルバーと一緒にいるために王宮にきた。

だが、来てから肝心のシルバーに会えていない。

確かに、色々と気まずい所があるのもだが、実際王子という人は国
の為に忙しいのだ。

よく、魔法学校に潜り込む余裕があったものだ。

リリイも、改めて会いに行くのが恥ずかしくて、ラルリーグとジ
オガードにしか会えていない。

シルバーの兄である第一王子のダイヤレスは、リリイに対しての誤
解を謝罪してくれたが、それ以来会えていない。

王様には三日前に会ったが、緊張しすぎてよく覚えていない。

使い魔のアンは色々な所でつまみ食いばかりしている。

とりあえず、シルバーには一回でもいいから会いたい。

この状態で婚約式なんてそれこそ、気まずすぎる。

リリイは、カップを口元に持って行きながら、ジオガードを一瞥する。

「……主なら、夕食後に私室に戻るはずだよ」

「分かった。ありがとう」

リリイが言葉を発しなくても、分かってくれたようだ。

「だけど、絶対に動きまわるなよ。あとで怒られるのは主だからな」
「分かってる」

そう頷きながら、リリイは小さく舌を出す。

今日こそ、会おう。

そして、謝って話を少しでいいからしたい。

それぐらいしたって罰は当たらない。

ラルリーグは、小さく笑い紅茶を飲みほした。

リリイの事をお見通しと言わんばかりの優しい微笑みだった。

闇夜に潜む影

リリイは久々に、魔法学校のローブに袖を通していた。

夜の時間、出歩くのははしとないと教えられたばかりなので、堂々とは行きにくい。

素早く動くには、ドレスでは目立つし動きにくい。

こういう時ローブは動き易くていい。

なんだか、三日前までは当たり前前の様に来ていたローブが少し懐かしかった。

そしてこっちの方が馴染む。

メイドには寝ると言い、下がってもらっているので今は一人だ。鏡の前に立ち、リリイは一回転する。

貴族の教育を受けても、見ため的には何も代わり映えがしない。

魔法使いの卵のリリイ。

侯爵家の娘のリリイ。

同じじゃいけないのに、変わらない。

ドレスも似合わない。

亜麻色の髪も濃茶の瞳も普通すぎてつまらない。

シルバーは私のどこが好きなのだろう。

どうして、ずっと思っていてくれたのか、分からないから不安になる。

それに、魔法学校での出来事が解決したとはリリイは思っていなかった。

きつと、シルバー達は何かを隠している。

リリイが知っているのは表面的で、トイ達の思惑の真意は分からないまま。

どうして、狙われたのが自分だったのか。

ハールン一族だから？

ハールン一族、妖精族の血を唯一受け継ぐ一族。

リリイの母はそのハールン一族の長だった。

だからきつと、リリイにも妖精族の血は流れている。
でも思い出せない。

里での記憶が抜け落ちている。

里に入る前の、シルバーと出会った記憶は思い出したけれど、六歳から二年前までの事は思え出せないまま。

何かあったはず。怖い何かが。

それは心のどこかが悲鳴上げるような、嫌な感覚。

トーイは、かつての同級生はダキネルの民だった。

ダキネルの民はハールン一族の相反の存在。悪魔族の血を受け継ぐ唯一の民。

トーイはリリイを襲った。殺そうとしたというよりは・・・

リリイは拳を握り締める。

シルバーには知られなくなかった。シルバー達があと少し来るのが遅かったら、きつと二度と顔を合わせられない仕打ちを受けていた。

それは女の子にとって、殺されるよりも辛い仕打ちだ。

もつと、もつと強くなりたいたい。

「早くいかないと……」

リリイは頭を振り、考えるのを中断した。

今はとにかくシルバーに会いたかった。

仲直りをしたい。

あの人の笑顔を見たい。

胸元には真珠のペンダント。

シルバーに借りてからずっとリリイが持っている。

これがあれば勇気が湧いてくる、そんな気がするのだ。

リリイは、静かな廊下を、そつと歩き始めた。

王宮の中は、とにかく広い。

リリイは勘がいいから三日の間にある程度、どこに何があるかぐら
いは覚えているが、普通の人なら、簡単に迷ってしまう。

その方が、いざ敵に押し入れられても平気なのかもしれない。

シルバーの私室があるのは北の棟。

庭園を抜けた方が早い。

リリイは庭園に入り、空を見上げる。

スグワール公国よりも月が近いように感じる。

王家の象徴の月。闇夜を切り払う退魔の光。

シルバーの魔力も月明かりと同じ光が宿っていた。

その時に気付くべきだった。まあ、気付くのが早くても遅くても、
意味はないけれど。

気持ちは決まっていたから。

リリイはふと、歩く足を止めた。

耳を澄ませると、足音がいくつか聞こえてくる。

リリイはローブの裾を握り締めた。

その足音は、リリイを囲むように近づいて来ているのだ。

ここは王宮。

怪しい身分の者は入れないはず。

変に騒ぐと、シルバーに迷惑がかかる。

三日月が優しい光を降り注いでいく。

リリイはローブの中からグローブを取り出す。

グローブの甲の部分には紫水晶がはめ込まれている。これは、戦闘
用に魔法を増強させる増幅器。

魔法を発動させるのではなく、魔力の流れを使い、体の強度を上げ
るものだからリリイでも扱える数少ない増幅器。

トイとの出来事以来、ローブの中に忍ばせておくようにしたのだ。
まさかこんなに早く役立つ羽目になるとは思っていなかったのだが。

刃物に月明かりが一瞬反射する。

その瞬間、ナイフが降りかかってきた。

リリイは伏せて、ナイフをよける。そして素早く立ち上がると、ナイフが降ってきた方向に走り出す。

矢が飛ぶ。

どうやら顔を見られない様に間接的に襲うつもりらしい。

それとも、リリイは体術が得意だが魔法が苦手なのを知っているのか。

体術と間接攻撃、どちらが有利かは一目瞭然だ。

だが、怯みたくない。

リリイは拳を突き出すと手ごたえを感じた。

すぐに地面に手をつき、足を振り上げる。

男のくぐもる声が聞こえた。

だが、すぐにリリイは髪を掴みあげられた。

そのまま、茂みに連れ込まれる。

口を塞がれ、腹の上に馬乗りされる衝撃で噎せそうだった。

また、意味分からず襲われなければならないのか。

どうして、王宮にこんな事をする者がいるのだらう。

手を引いているものが王宮内にいるというのか。

トリーの時と似ている。

だが、今リリイを襲っている男たちはリリイを殺そうとしている。

月明かりが禍々しく大振りのナイフを光らせる。

一か八かで魔法を発動させるしかない。

だが、口を塞がれたままでは詠唱が出来ない。

どうする。どうしよう。

私はただシルバーに会って謝ろうと思ったただけなのに。

こんな事なら、もっと早く謝りに行けばよかった。

「ハールン一族に制裁を！」

男が呟く。

リリイがハールン一族だと、この男は知っている。おかしい。新聞にも載っていないし、内密になっっている筈なのに。

いや、トーイやニスが知っていたのだ。黒教徒やダキネルの民なら知っているのか。

どちらにしてもまずい。

ナイフが躊躇いもなく、振り下ろされる。

緑の少年

草木がざわりと、騒いだ。

風に揺れるというよりも、自ら動いているような不思議な感覚。草木に宿る生命の力が周りを取り囲んでいく。

リリイは目を大きく見開いた。

何が起きたのか一瞬分からなかった。

男に馬乗りされて、ナイフが振り下ろされていた筈だったのに。

リリイは離れた場所の木に引き寄せられていた。

男は蹲っている。

いや、よく見ると鳶が男に巻き付き、締め付けられているからか気絶していた。

呆然とするリリイの目の前に少年が立っていた。

月明かりを吸収して輝くのは若草色の短い髪。そして、新緑の輝きを宿す瞳。

額には黒い布を巻いている、不思議な少年。

年は十にも満たないだろう。それぐらい幼い。

だが、腰には剣を差してマントが風に靡いている。

まるで騎士の様な少年。

「君は……？」

リリイは絞り出す様に声をかける。

思った以上に声が震えていた。やはり、怖かった。怖さで腰が立たない。

少年はリリイに歩み寄り、小さく礼を取る。

まさに騎士が行う礼の取り方だ。

「ご無事で何よりです。リリイ様」

見た目よりもずっと大人びた口調だった。だからなのか。すごく存在を感じさせる雰囲気醸し出している。

「私を知っているの？」

「今の世の中、あなた様を知らない者はそうはいません。今、一番有名な愛の象徴であり、命が危うい存在であるリリイ様を」

「ど、どういう……」

ひゅんと、矢が飛んでくる。

少年は素早く、リリイの前に立つ。

足音は複数。一人ではない。あと何人も残っているのだ。

少年が剣を抜く。背に合わせてある小さな剣。だが、淡く翠の光を宿す美しい刃の剣だ。

飛んでくる矢を剣で易々と薙いでいく。

強い、この少年。

だが、数があまりにも多い。

木の幹に幾つも矢が刺さっていく。

リリイは少年に庇われながら、両手を合わせる。

この距離なら魔法を発動できる。

「数多を駆ける風の子らよ その無邪気な心を我の力となり 我の思いをのせ給え」

少年がリリイの詠唱に気が付き、驚いたように大きく目を見開く。

「リリイ様！！ 魔法は……」

「風の精霊ジルフェー！！」

少年の言葉が遮るように魔法が発動する。

リリーの制御がきかない巨大な魔法が突風を起こし、男たちを巻き込んでいく。

少年が思わず目を手で覆ったのは突風を遮るためか、項垂れているか様にも見えるのは気のせいだろうか。

リリーは、自分の魔法の突風に押され、必死に堪える。

だが、魔法はリリーの魔力を吸いつくし、リリーを吹き飛ばした。

「リリー様!!」

少年が手を伸ばすが、距離が足りなかった。

リリーは花壇へと吹き飛ぶ。

緑の少年（後書き）

とうとう彼の登場です。

この少年をずっと書きたかったですww

悪ガキ三人組参上

「月夜よ 精霊の怒りを鎮め給え!!」

どこからか、叫ぶような詠唱が響く。

月明かりの様な、銀の光がリリイを包み込む。

花壇に叩きつかれる寸前の出来事だった。

リリイは宙に止まり、その場に静かに下ろされた。

突風も嘘の様に収まっている。

息が切れる。意識が朦朧としてきた。

魔力を使いすぎたため、体が悲鳴を上げている。

やはり、リリイは魔法が扱えない爆弾娘のまま。

侯爵の娘にも、魔法使いにもなれない。

リリイは優しく抱きあげられ、ようやく気がついた。

「シルバー……」

「怪我していないか？」

優しい満月の月夜の蒼い瞳。月明かりの様な短い銀の髪。

シルバーが魔法で助けてくれたのだ。

リリイは小さく首を振り、シルバーの首に抱きついた。

かすかに聞こえてくる嗚咽が切ない。

シルバーは宥める様に、リリイをもっと抱き寄せる。

そして、呆然と立ち尽くす少年に向き直った。

「王子、何故……」

「俺がここにいるのはおかしいか？ エメラルド」

エメラルドと呼ばれた少年は、びくりと肩を震わせた。

シルバーの目が、ずっと鋭くなった。

リリイには見せない、刃の様な視線をエメラルドに投げかける。

「この騒ぎ、お前だけではないはずだな？　あと二人の悪ガキも近くにいろのだらう？」

何の話だろう。

リリイは話が飲み込めず、そのまま口を閉ざす。

シルバーはリリイを襲った男よりも、リリイを助けてくれた少年を咎めている様だ。

かなり怒っているのが声の低さと口調からひしひしと伝わってくる。エメラルドは小さく肩を落とした。

降参と言わんばかりだ。

それを見て、シルバーは指をぱちんと、鳴らした。

その瞬間、氷の刃が草むらへと降り注ぐ。

「きゃあ」

「うわあ」

甲高い声が響き、草むらから少年と少女が飛び出してきた。

リリイはそっと、その様子を見やった。

漆黒の髪に、黒曜石の様に輝く瞳の少年と少女だ。

首には長い数珠を巻き、額には水晶の飾り。

スグワール公国があつたのは北大陸。魔法が盛んに使われているのは北大陸。

あと王都をはさんで反対側には、南大陸がある。

南大陸では呪術という術が盛んに行われ、文化が全く違う。

今出てきた少年と少女は南大陸で使われている呪術に使用する数珠を持っていた。

リリイも数珠を見たのは初めてだ。

ジオガードが出てきた少年と少女を掴みあげる。
さすが、臣下と言い張るだけあって一緒にいたのか。
その後ろから、ラルリーグも来てくれていた。

「ひつどーい！！ ジオ様は子供を虐待する気！？」
「刺さって死んだらどうするんだよ！！」

ぎゃんぎゃんと喚く声が夜空へと響いていく。
ジオガードは容赦なく二人を両脇に抱え込んだ。

「どういう事……？」
「悪ガキにしてやられちゃったみたい」

やれやれと、ラルリーグはリリーの横に来て、小さく笑う。
悪ガキ？

この子たちが？
エメラルドを見ると、申し訳なさそうにこちらを見ていた。

「リリー。この三人は九大公爵家の問題児といわれている悪ガキなんだよ」

「失礼ね！！ 悪ガキって決めつけているのは大人だけでしょ！！」

少女が憤慨しながら叫ぶ。

この様子を見ると、悪ガキと呼ばれているのが分かる気がする。

「申し訳ありません。こんな状況にする気はなかったのです」

エメラルドは膝を折り、頭を下げる。
礼儀正しいこの少年が問題児で悪ガキだというのか。エメラルドが
そっという存在には、リリーは見えないと思う。

「好安と桃蘭も謝れ。こつちに非がある」

エメラルドは少年と少女に一瞥をくれながら、早口で言った。
少年、好安と少女、桃蘭はしぶしぶ口をつぐんだ。
でも、謝る気はないらしい。

「……という事は、今のは？」

リリイが恐る恐ると聞く。
なんだか、嫌な予感がする。

「申し訳ございません。今回の事は好安と桃蘭が式神で作った敵から私が助け出すという、芝居でした」

という事は、リリイは子どもに騙されていたという事だ。
一気に体の力が抜けていく。

すっかり騙されて、魔力を使い切るなんて恥ずかしすぎるではないか。

ラルリーグは冷静ながらも、柔らかな笑みを三人に向けた。
子どもの反抗心を打ち負かしそうな、隙のない笑顔を。

「どうして、リリイを襲ったのかしら？」

「えっと、それは……」

エメラルドは口ごもる。

何か、理由でもあったのだろうか。

好安と桃蘭も口を閉ざしたままだ。

だが、ラルリーグはきつと、聞きだすまでは離さない気だ。
ジオガードがにやりと笑う。

「そうだな……最近暑くなってきたから噴水で水浴びでもしてもらおうか？」

リリイはぎよつとする。

いくら季節は夏に向かって来ているとはいえ、夜はまだまだ寒い。こんな寒い夜に水に放りこんでもしたら、確実に体調不良を起こす。エメラルドの顔色が変わる。

言えば、きつと噴水に落とさないという事を察したのだろう。だけど、こんな小さな子どもを脅すなんて、どうかしている。

「私は唯……リリイ様がどんな人なのか知りたかっただけです」
「ほう？　それで八百長をするなんて、いい御身分な事だ」

エメラルドがぐつと唇を噛み締める。

ジオガードが言っている事は、正論なのはよく分かる。だけど……

「もう、いいじゃない」

リリイはシルバーから降りる。

そして、シルバーを見上げた。

複雑そうな表情を浮かべて見つめ返えしてくる。

でも、リリイはどうしてもそれはしてはいけないと思う。

ゆっくり、エメラルドに向き直る。

気持ちが落ち着いて、体も安定してきたからこれぐらい平気だ。

「やり方は人それぞれだと思っわ。でも、傷つけるようなやり方は、あなた自身を苦しめるわ。分かる？」

「はい」

エメラルドは素直に頷いた。
リリイは優しく笑う。

「だったら、今度私のお部屋に来て？ お話をするのも大切だから」

エメラルドがぱっと、顔を上げた。

嬉しそうに輝いている。

子どもらしい明るい笑顔に、リリイもつられて気持ちが明るくなった。

ジオガードは何か言いたげだったが、リリイの言葉に従い、好安と桃蘭を離す。

ラルリーグは「しょうがないわね」と呟き、いつもの優しい笑顔に戻っていた。

シルバーは、肩をすくめて小さく笑っていた。

「ありがとうございます！！」

エメラルドは大きく頭を下げ、好安と桃蘭と駆けながら王宮内へと消えていった。

リリイは満足そうに笑い、立ちあがる。

「お人好しは足元をすくわれるぞ」

ジオガードの視線が少し痛い。

確かに、助けに来てくれたのに勝手に逃がしたのは悪かったかもしれない。

でも。

「あの子はきっと、悪い子じゃないと思うよ。目を見ればわかるも

の
」

「確かに、リリイの心の目は確かだからね」

そう言っで、シルバーはリリイの頭を撫でた。

また子ども扱いされている？

でも、今日は怒る気はしない。

シルバーに見つめられ、胸が跳ね上がった。

そうだ。この人と仲直りしたかったから、ここまで抜け出してきたのだった。

急に意識すると、恥ずかしくなってきた。

仲直り

「シルバー」

「ん？」

「まだ怒っている？」

リリイは恐る恐る、シルバーの表情をうかがう。
怒っていたらどうしよう。

吹き飛ばして、嫌な事も言った。

嫌われてしまっているかもしれない。

しかも、今も結局迷惑をかけてしまった。

いつの間にか、ラルリイグとジオガードの姿も消えた事にリリイは気付いていない。

シルバーは一瞬きよんとした。

それから嘖き出すように笑った。

「え？ な、何？」

「いや、リリイこそ怒っていると思っていたから安心したんだ」

「だって……」

「うん。リリイが怒ったのは仕方がないよな。俺のやり方が良くなかったって反省しているよ」

そう言つて、優しく頬を撫でられる。

体中が鼓動に変わってしまったかのようで、息が苦しい。
気がつけば、シルバーの顔がすごく近かった。

吐息がかかってしまいそうで、呼吸が上手く出来ない。

「体が引けているけど？」

満面な笑顔のシルバーの意地悪な言葉に、リリイの頬は一気に紅潮していく。

追い詰められているような感覚が、体を引かせているらしい。

「よ、夜も遅いし、そろそろお部屋に帰らなきゃ……」

言葉が上手く出てこない。目を逸らしたいのに逸らせない。魔法学校の時は、リリイの渾身の力でなんとか抜けだせた。でも、今回のシルバーは見逃す気はない。逃げる前にしっかり腰を掴んでいる。

「ちょ……」

「三日も反省したんだよ？ 少しはご褒美ちょうだい、リリイ」

この人、きつと反省なんて全然していない。意地悪な微笑みが、リリイの心をかき乱す。

どうしていいのか分からず、リリイは硬直するしかない。

きつと、そんなリリイの姿をシルバーは楽しんでいる。

愛しくて、たまらなく思っている。

近すぎて表情が読めないぐらいの距離まで、リリイをシルバーは引き寄せた。

「仲直りのキス、してもいい？」

リリイはいっぱいいっぱい、答えられない。でもシルバーはくすり、口元を緩ませる。

ふと、感じるの優しい感触だった。

「おいエドー！」

好安に引きとめられ、エメラルドは足を止めた。

桃蘭は息切れがひどく、その場に座り込んだ。

リリイに逃がしてもらってからずっと走って、さすがに疲れたらしい。

「リリイっていう女、結局どうだったんだ？ やり損だったっていうのは勘弁だぞ」

「そうよ。結構式神を動かすの大変だったんだから……」

二人から責めるような視線を受け、エメラルドは振り返る。
満足げなこの表情、いつ以来だろうと好安は思った。

「間違いなく、リリイ様は本物だよ。会って確信した」

嬉しそうにエメラルドは何度も頷く。

桃蘭は呆れたように、エメラルドの背中を叩く。

「当たり前よー。こんな大仕事してスカなんて、許さないもの」
「でも、エド」

好安は桃蘭を引っ張り起こしながら満足げな親友の顔を窺う。

「ハールン一族は真紅の瞳に夕焼けの髪、だったろ？ あの女、亜麻色の髪だったじゃないか」

「そこがちょっと気になるよな」

確かに、とエメラルドは首を傾げる。

確信は持てているが、疑問が解決したわけではなかった。それでも、やっと見つけれられたことが何よりも嬉しい。

「リリイ様の傍にいれば謎が解けるかも知れない。だろう？」

少しぐらいの疑問を気にしては動けない。

エメラルドは胸元に隠してあるペンダントにそっと触れる。これがある限り、諦める訳にはいかないのだ。

「とりあえず、婚約式までは大人しくしておいてくれよ？ 好安に
桃蘭」

「お前を怒らせると後が怖いからなあ。了解、了解」

「人聞きが悪いわ！ いつも問題を起こしているみたいじゃない」

いや、起しているから大人達に目をつけられている三人なのだ。エメラルドの非難するような視線に「わかったわよ」と桃蘭も渋々頷く。

エメラルドは満足そうに窓から夜空を覗いた。

一緒に

「わ、私。本当に自分のお部屋に帰りたいんだけど」

リリイは引きずられる様に、椅子に座らせられた。

「だって、本当はここに来るつもりだったんだろう？」

につこりと笑い、シルバーはリリイの横に座る。

確かにリリイはシルバーの私室に向かっていた。仲直りをするために。

だが、シルバーの寝室に向かうなんて思っていなかった。

すぐく、はしたない娘だと勘違いされている気がする。

いくら恋人とは言え、男の人の寝室に夜に向かうなんて、リリイにしてみればはしたない事でしかない。

シルバーに聞いて知った事は、北の棟にあるのはシルバーの私室でも寝室だという事。

完全にジオガードに騙された。

本当に困り果てている状態だ。

ふと、顔を上げるとシルバーの顔がすぐ近くにある。

「な、なな何？」

「いや？面白いなあって」

そう言つて、リリイの髪をすくい取つてキスを落とす。

こ、この男は……

隙あれば、どんどん調子に乗っていく

仲直りのキスは一回では済まなかった。

リリイの髪だろうが、額やこめかみにも何度もキスを落とすのだ。

うといリリイなんてきつと、一口で食べてしまえるだろう。
シルバーはくすくすと笑う。

「そんな顔をしなくても食べたりしないよ？」

「う……」

きつと、すごい顔をしているに違いない。

顔が熱くて火を吹いている様だった。

でも信用できない言葉だ。

なんだかんだ言いくるめられ、ここまで連れてこられてしまったのだから。

「それとも食べてもらいたい？」

「ばかつ！」

リリイは悔しくて、恥ずかしくて顔を背けた。

どんどんシルバーのペースに吞まれていく気がする。

怒っていた筈なのに。

ちよつと仲直りしようと思っていただけに、こんな事になるなんて。

ふと、うなじに熱い刺激が走る。

「ちよ、ちよつと……！」

「そつぽを向いたから罰」

そついつて、満足そうな顔は崩れていない。

シルバーの余裕はどこから出てきているのだろうか。

「大丈夫、今夜はこれ以上の事はしないから」

安心させたくて言っているのだろうか。
だけど「今夜は」って。

じゃあ明日の保証はないという事か。
リリイはじとりとシルバーを睨む。
なんだか、涙目だ。

「何もしない？」

「ああ。もちろん」

「キスもぎゅーもなしだよ？」

「……」

「何で、黙るのよ！」

「だって、そこは……別格？」

そう言つて、リリイを優しく抱きよせる。

すっぽりと、リリイはシルバーの腕の中に収まってしまふ。

こうなると、逃げたくてもなかなか逃げ出せない。

シルバーの吐息が耳にかかった。

「だってさ、リリイにずっと触れたかったんだ。手に入れたかったんだ。でも、リリイは俺の事覚えていないし。結構」

寂しかったんだ。

吐息のような小さな囁き。

そうだった。

シルバーはずっとリリイを探してくれていた。
ずっと好きでいてくれた人。

それは信じている。

私だって、もうシルバーと離れたくはない。

「それに、魔力使い切つて疲れているだろう？そんなリリイに無理

強いなんてしないよ」

「うん分かった……」

きつと、覚えている分、寂しい思いを重ねてきた。

どんな思いで庭師になっていたのだろう。

シルバーの思いにもっと答えてあげた方がいいのではないだろうか。

「ちょっと、ね？」

恐る恐るシルバーを見上げる。

そこから満面の笑みが降ってきた。

ああ。もう本当にシルバーの思うつばにはまっている気がする。

「分かった」

そう言うと、額にキスが落ちてくる。それから、長い口付け。
まだ少し怖い。

でも、すごく心地よい感触。

リリイは急に眠気が襲ってくるのを感じる。

優しいシルバーの温もりが嬉しかった。

「おやすみ、リリイ」

シルバーの声を遠くで聞いて、リリイは眠りについた。

リリイをベッドに寝かせ、シルバーはソファに寝転んだ。

それがせめての、シルバーの誠意の表しだった。

一緒に（後書き）

なんか短くてごめんなさいwww
上手く区切れなくて……

夢の中の少女

リリイはゆらゆらと揺らぐ世界に立っていた。
もう知っている。

ここは夢の中。自分の潜在意識の中だ。

シルバーを思い出したきっかけを与えてくれたのもこの夢の中。
最初の頃は覚えていなかったが、シルバーの存在が強くなるにつれて記憶に残るようになっていた。

きつと、自分が忘れてしまった記憶もこの中に眠っている。

シルバー達が必死で隠している何かも。

ここは不安になって怖くなっていく。

早く出たいと思うのは防衛本能？

知ってはいけないものに触れないために。

ふと、小さな泣き声が聞こえてくる。

悲しみに絶望するような切ない泣き声。

リリイは辺りを見回す。しかし、白い靄にかかっている夢の世界に変化はない。

怖い、と思う。

でも、知りたいという気持ちかわずかに上回っていた。

リリイは声のする方へと走っていく。

手足が冷たくなって、ずきずきと痛み始める。

夢の中なのに、痛覚がはつきりしていた。

何か、入ってはいけない領域に無理やり踏み込んでいるかの様だ。

白い靄が揺らぎ始める。

リリイは足を止めて、靄を見上げた。

靄に映像が映されていく。

これは私の記憶？

それとも違う何かだろうか。

広い荒野だった。

草が枯れ、大地にも生気が感じられない。

ここはどこ？

今の世界にこんな所があるというのか。

その荒野に座り込む少女が見えてくる。

すぐに分かった。

泣き声はこの少女から零れる心の悲鳴だ。

少女は碎けた何かを握りしめ、涙を流している。

夕暮れと同じ色の長い髪が風に靡いていた。

瞳の色が、よく見えない。

そして、少女の目の前には青年が一人倒れていた。

リリイは思わず口を押さえる。

青年は大量の鮮血の中、息絶える寸前だ。

青年の髪が血を吸って黒ずんでいて、あまりにも悲惨な姿。

でも、表情は不思議と安らかなものだった。

まだ新緑の瞳には輝きが残っているが、でもあと僅かだと分かる。

少女は溢れる涙を止められず、ずっとずっとただ涙を流している。

どうして……？ どうしてなの……

少女の嘆きの呟き。手に握っているものが何か見えてきた。

あれは碎けた……翠玉。

泣かないで……愛しい人……

青年が小さく笑う。

あの怪我で話せるなんてあり得ない。

それでも、青年は語りかけていく。

私は幸せでした……あなたの為……

いやよ！ どこにも行かないって約束、したじゃない。

少女の涙を受け、青年が切なさうに目を閉じる。

もう、長くはないのだろう。

それでも、青年はもう一度目を開け、少女を愛おしそうに見つめる。

青年は少女の手を取り、そっと掌に優しく口付けをした。

シルバーがリリイに結婚の証をつけた時と同じ……

リリイはその行為の意味を知っていた。

だからなのか。

あまりにも二人が切なさすぎる様に見えた。

あなたは……長く生きてください……愛しいパール……

ああ。だめよ、行かないで！！

少女が青年の体を揺らす。

愛おしそうに少女を見つめたまま、青年は動かなくなった。

少女が否定するように何度も頭を振る。

いやああー！！

少女の絶望の心の叫びが響いてくる。

リリイは溢れてくる涙を止められなかった。

少女の心の悲鳴がリリイに直接響いてくる。

少女は、この青年が好きだった。

愛しくてたまらなかった。

なのに、運命はあまりにも残酷で。
悲しくて、悲しくて……叶わない悲恋。

……ど……い……

少女の声がどんどん聞こえなくなってくる。

少女が青年の名前を何度も呼ぶ。

でも、遠くなっていくリリイの耳には届かなかった。
何も出来ない。

この少女は……パールという少女は。

リリイはそこで意識が飛ばされるのを感じた。

「あああ！」

リリイは宙を掻くように、両手を伸ばして目を覚ました。

どきんどきんと、胸が痛い。

これは自分の心の痛みだけではない。

止めどなく溢れる涙に、リリイは切なくて、呼吸ができない。

息をしたくても、体が忘れてしまったかのように上手くできない。

「リリイ……！ しっかりしろ」

ふと、抱き起こされる。

目の前に輝くのは蒼い月の輝き。

もがき苦しむリリイの口が塞がれた。

優しい息が何度もリリイの中に入っていく、ようやく呼吸の仕方を
体が思い出す。

「シルバー……」

「水飲むか？　すごい汗だ」

シルバーに額にへばりくっ付いている前髪をかき上げられる。
ぼんやりと、ここがどこなのか思え出せない。

シルバーと仲直りをして……そうだ。

ここはシルバーの寝室。夜遅いからと、半ば強引に泊めさせられたのだ。

シルバーの腕の中で眠って、ベッドに寝かしてもらったらしい。
なのに、どうして。どうして……

夢とは思えない。

怖い。あの少女の絶望の叫びが、耳から離れない。

「パール……」

「何？」

リリーの小さな呟きが聞こえなかったようで、シルバーは水差しを
引き寄せながらリリーを見下ろす。

「夢……」

「怖い夢を見たのか？」

シルバーの質問に、リリーは静かに頷く。

子どもっぽいと笑うだろうか。

でも、夢でも夢じゃないような感覚だった。

パールという少女。

私とどんな関係があるのだろうか。

シルバーは小さく息を吐き、水を口に含む。

そのままリリーの顎を掴んで、水を流し込んだ。

なんだか、すごくほっとできる心地よさだった。

「話したくないなら無理して話さない方がいい。きっと、疲れているんだよ、リリイ」

そう言つて、優しく抱き寄せられる。

よかった。シルバーが傍にいてくれて。

一人で眠っていたら、心が締め付けられて死んでしまったかもしれない。

・・・それほどの胸の痛み。

あの少女は一人、それを抱えるのだ。

「夜明けまでまだある。一緒に寝よう」

そう言つて、シルバーはリリイを抱き寄せたままベッドの上に寝転んだ。

リリイはシルバーを抱きしめ返す。

強くて温かなシルバーの胸に頬を寄せる。

今度は何となく平気な気がした。

リリイは今度こそ夢を見る事無く、静かに眠りについていった。それを見届けて、シルバーはそっとリリイの頬に触れた。

「俺のせいなのか？」

君が苦しい思いをするのは。

平穩に自由に生きていた筈のリリイ。

自分が現れなければもっと自由だったのかもしれない。

君を諦められたらどれだけ良かったのだろう。

足枷をしているのは予言ではない。

結局、リリイを振り回して自由を奪ったのは自分なのだ。分かっていても無理なのだ、君を手放すなんて。

リリイはどう思っている？
心の底では恨んでいるかもしれない。

「ごめん。ごめんな……」

シルバーは泣きそうになりながら、リリイを強く抱きしめた。

気になる事

「主、今日は機嫌がよろしいですね？」

ジオガードは気力のない言葉をシルバーにかけながら、今日の予定を書き込んでいた。

昨日の朝までとは違い、すこぶる元気そのものだ。

「ああ。栄養補給したからな」

その言葉で、ジオガードは何となく昨夜に何があったのか把握できた。

きつと、すぐにラルリーグが押し掛けてくるに違いない。

あれは過保護すぎると思うが、気持ちも分からなくはない。

そう、理解してはいるが優先順位は主が先なので、ドアの鍵を掛けておく。

少しは俺を想ってくれてもいいのに……ラルリーグの優先順位は断トツでリリーなのだ。

面白くない。

「主は干乾びるイカみたいでしたからね。少しぐらいならよろしいと思いますけど？」

「……また言葉の棘が大きいな。お前ならラルにたくさん会えるだろう？」

「それ以上言ったら、主でも口を塞ぎますけど？　よろしいですか？」

かなり機嫌が悪い。

そう悟ったシルバーは言い返したい気持ちを抑え、仕事に取り掛か

った。

大抵は報告書を読み、有無のサインをするだけ。
だが、言葉どおりに山となっている報告書は一向に減らない。

「なんでこんなに……」

もう何度目か分からない眩きが出てくる。
サインしてもサインしても減らないのは、一種の魔法がかかっている
とは思えない。

「勝手に城を出ている間に溜まったんですよ。しかも、昨日までは
ナメクジでしたからね」

それは本当の事だった。

リリイを怒らせてしまったまま王宮に來させてしまったので、相当
怒っていると心配していたのだ。

会うのが怖くて、でも会いたいし……で、ナメクジ状態だったのだ。
別に全く反省していなかったわけではない。

リリイの自由を奪うのが自分なら、自分が足になるしかない。

その為には弱っている所を曝け出すわけにはいかなかった。

だから本当は心が今も傷んでいる。

機嫌が良い振りなだけ。

「今日は大丈夫だから、とっとと終わらせてしまおう」

その為にはこの山を無くさなければ。

「ところで、悪ガキどもは何をしている？」

手を動かしたまま、シルバーは横で報告書を整理しているジオガー
ドに声をかけた。

こいつの事だ、絶対に調べてあるはずだ。

そういう確信を持って話せるのも、長い付き合いからの直感だった。案の上ジオガードは頷いて、手帳を取り出した。

「エメラルド・ピース。ピース家の公弟は王宮に来てからの日課である剣の素振りを千回やっています」

「熱心な奴だな。さすが騎士を排出するのが世界一の国だ。見たところ、技術はそこいら辺の騎士よりもありそうだ」

くすくすと笑いながら、シルバーはサインを進める。

王宮の騎士団に向かって、そんな事を言えるのは王子のシルバーぐらいなものだ。

「義好安。木安公国の公子は、果蘭公国の公女、泉桃蘭と図書館で読書中です」

「そうか。確か呪術の腕前は公爵達が手を焼くほどらしいな」

「大人への反抗心が強い子どもたちです。何を思っけてリリィを襲ったのかはまだ分かっていません」

シルバーは疲れた手を休め、小さく背中を伸ばす。

昨日のリリィの姿が目の奥に焼き付いていた。

すごく怖い夢を見た、というのだけは何となくわかる。

だが怖いのか、どう話せばいいのか分からないのか、内容は話してくれなかった。

「もしかして……」

里のにいた事を思い出したのだろうか。

だったら、傍に居てくれるはずが……

それとも、ここにいる事が重荷になっているのだろうか。

「主、手が止まっていますよ」

ジオガードの言葉に、シルバーは顔を上げる。
紅茶の湯気が目の前に漂っていた。

「今日は栄養補給したのではないのですか？」

「あ、ああ。そうだったな……」

「迷うのはやめたんじゃないのですか？」

ジオガードは全て見抜いている。

それで気遣ってくれているのだ。

口は悪いが、最高の臣下だ。

「そう言えば、パール……」

シルバーはふと思い出す。

リリイは夢から覚めた時、うわ言の様に確かに呟いたのだ。

聞き返した時は「夢」と言っていたが。

「パールって王家の名だよな？」

「ええ。それは王家直系の第一王女しか使われるのが許されない名です」

ライツパー王家が始まって約千年。

その間に王家の直系は男子しか生まれていない。

だから、「パール」という名の王女はまだ存在していないはずなのだ。

どうしてそんな事をリリイが呟いたのだろう。

シルバーは頭を振った。

「それより、リリイは今日いつ終わるんだ？」

考えても仕方がない。

少し様子を見てみよう。その為には、出来るだけ近くにいなければ。なんて、会う為にいい理由が見つかったただけだが。

「今日の午後は何もありませんよ。きっと、エメラルド達に来るでしょうけど」

「なら一石二鳥じゃないか」

「でしたら……山を早く片づけてください」

シルバーは減らない山をもう一度見やる。

「分かっている……分かっているよ！」

シルバーは小さく息を吐きながら再びサインを始めた。

お茶会の始まり

午後のお茶に、リリイはラルリーグに頼んで悪ガキ三人を招待することにした。

昨夜の事を責めたりするつもりはないが、何を思っていたのか、詳しく知る権利はあるはずだ。

しかも、子供相手だったら覚えてたてのお茶の作法も気楽にできそうな気がする。

「シルバー様は呼ばなくてもどうせ来るわよ、きっと」

と言い、シルバーに声をかけなかったのはラルリーグ的な小さな仕返しらしい。

確かにシルバーは三人の事をよく思っていない気がするし、拗れる気がしなくもない。

という事で、シルバーには内緒のお茶会の始まりだった。

「一人で大丈夫？ 私、シルバー様の手伝いなんてしなくてもいいんだけど」

シルバーの仕事が相当詰まっているらしく、ダイヤレスに手伝うように言われたらしい。

本当はリリイも手伝いたいけど、リリイには分からない仕事だから手伝いようがなかった。

「大丈夫だよ。私だって出来る事頑張るわ」

「何かあったらすぐに呼んでね？ あの子たちは厄介だから」

「うん。ありがとう」

そう約束して、リリイはラルリーグを見送った。
ラルリーグも早く済ませればシルバーが向かうはず。
そう思い、手伝いに急いだ。
残ったのはリリイだけ。

ラルリーグがいなくても何とか頑張れるだろう。
リリイは子ども達の事がどうしても気になっていた。
昨夜の思惑も気になるが、特にエメラルドが気になる。
あの子を思い出すと、何故か夢の残像が飛び交う。
あの絶望的な悲しみの少女の事を……

「お招き、ありがとうございます」

エメラルドは嬉しそうに、リリイの客室のテラスまですぐにやって来た。

お土産の小さなバラの花束を携えながら。

「いらつしゃい、エメラルド。あとの二人は？」

「もう来ていますよ」

エメラルドは小さく笑い、テラスのテーブルを指さす。
いつの間にか、好安と桃蘭がちゃっかりと座って、ケーキに手を伸ばしている所だった。

いつ来たんだろう……リリイは首を傾げたが、公爵家が手を焼いている子どもたちなのだ。

これくらいで驚いていたらきりがない。

「いらつしゃい。好安君に桃蘭ちゃん」

リリイが声をかけると、二人とも言葉を発する事無くリリイを穴が開くほど見つめる。

なんだか、品定めをされている様で変な気分だ。

「二人とも」

エメラルドの声に、好安と桃蘭はびくつとする。

無言で威圧され、二人は渋々リリイに挨拶の礼を取った。

「今日はお招きありがとうございます」

「いいえ。ケーキ好き？　たくさん食べていってね」

まあ、私が作ったわけではないけれど。

ちよつと申し訳なく思いながらも、子ども達にケーキを進める。きつと、昨日の事をラルリーグも気にしている様だ。

「おいしい。リリイ様、呼んでくれてありがとうございます！」

桃蘭はおいしいケーキを食べられて満足したのか、笑顔をリリイに向けてお礼の言葉を述べた。

とても子どもらしい反応だった。

でも、どこか打算的に見えるのはリリイが桃蘭の本質を見抜いてしまっているからだろうか。

リリイも合わせて頷いたり、話を合わせる。

好安は愛敬を振りまくわけでもなく、ただ黙々とお菓子を頬張りながらリリイを見ていた。

ふと、好安はエメラルドを一瞥し、小さく息を吐く。

「いつも三人は一緒なの？」

「はい。今は好安の父上の下で修業させてもらっています」

「私は好安の婚約者だから、いつも一緒よ？」

「え？　その年から婚約者が決まっているの？」

リリイの驚きに、桃蘭が鈴を転がしたかのように笑いだした。

「やあだ、リリイ様だって六歳で婚約したんでしょ？ 私たちも六歳よ？ そう変わらないわ」

確かに。リリイはシルバーと結婚の約束したのは六歳の誕生日の前日だった。

でもそれは自分の中で特別な思い出で、当たり前のことの様に思っていないかった。

貴族の子どもではよくあることなのかもしれない。

だから、シルバーもさらつと言えたのだろうか。

それはそれで、何だか複雑だ。

「なあ」

好安がリリイを睨むように見ていた。

直感的にリリイは「本題」に近付いたのを感じた。

「あんた、本当にハールン一族の生き残りなわけ？」

「え？」

唐突な言葉だった。

本題に近いと言えば近い話題だろうか。

本当にハールン一族の生き残りなのか？

それは、リリイ自身が自分への疑問として抱いている部分でもあった。

だから、どう答えればいいのか分からない。

しかもリリイがハールン一族だという事は公表されていない筈なのに、どうして知っているのか。

「分からないの。記憶がないから」

「え？　じゃあ何で」

「うん。でも全くないわけではなくてね。少し断片的な所は覚えているし、シルバーと過ごした日々は覚えているの」

リリイは素直に話す。

まさか話してくれると思っていなかったのだろう。

好安は大きく目を見開いてリリイを凝視していた。

エメラルドは何か考える様に、二人のやり取りを眺めている。

「今日は私が本物のハールン一族なのか調べに来たの？」

リリイの質問に、好安は素直に頷く。

思っていたよりも、ずっと素直な子ども達だとリリイは思いながらも、様子をしっかりと観察する。

「記憶を知りたいならエドに頼めばいいのよ、リリイ様」

軽い口調で、桃蘭はあっさりと言った。

リリイは首を傾げる。

どうして、記憶を知りたければエメラルドに頼めばいいのか、全く分からない。

エメラルドは「余計な事言ったって言っただろ！」と桃蘭を窘めている。

やれやれと、好安がリリイに小さく耳打ちした。

他の誰かに聞き耳を立てられない様に。

「エドはハールン一族の里の場所を知っているんだ。そこで、その木に触れば記憶を読めるんだよ」

「それって……」

リリイはエメラルドがピース公家の者だと、理解出来た。

ピース公国は騎士の国と言われ、騎士の名門。ピース公家が統治している。

そして、ピース公家の宿す象徴は「命」

特に木々の力に優れているという。

公家の直系は木々の記憶、会話を聞くことが出来るという。

エメラルドはピース公家の直系。

そうだったら、確かに分かるのかもしれない。

リリイが知らない事を。

このまま、知らない方がいいのかもしれない。

知らないままでも何も変わらないのかもしれない。

でも、それではいけないと思うのだ。

私が誰で、何を抱えているのか。

自分自身が分からなければ、誰も守ることが出来ない。

「でも、エメラルドは場所を知っているの？ 知っているのは王さ

まだけの筈よね」

「王が里の管理を任せているのがピース公家なのです。それはごく一部しか知りませんから。本当は私も知らない筈だったんですけど…… ちよつと前にやらかしまして」

さすがは悪ガキ三人組。

そこいら辺も網羅しているのはさすがだ。

歯切れが悪いところを察すると、内密な話を盗み聞きでもしたのだろう。

この三人はリリイに興味がある。

リリイが見る限り、何か企んでいる様ではなかった。

何かを抱えているのは分かるが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4355r/>

不思議な物語第2章

2011年10月8日12時22分発行